

辞典に見る日・中の国柄（1）

夏

剛

国語辞書に映し出される日・中の国柄や「漢字文化圏」内の断層

中国と日本の文化の比較は、文化の定義から始めなければ成らない。文化の概念は決定版が有り得ないので、双方の国語辞書で調べるのが手っ取り早い。事物の普遍的・本質的な特徴を捉える概念は「名辞」と呼ばれる言語に表現される故、代表的な国語辞書の説明はその国に於ける広範な共通認識を反映する典型性が高い。

和製漢語の「概念」は啓蒙思想家西周著『致知啓蒙』（瑞穂屋卯三郎、1874）が初出で、哲学者井上哲次郎等編『哲学字彙』（東洋館書店、1881）で独逸語の訳語として登場した（「Begriff 概念」）。森鷗外の短篇小説「追儼」（『東亜之光』誌、1909）の用例に由って、言葉で表される大体の意味内容に云う語義が添えられた。両義とも漢語の本場に逆輸出され中国でも好く使われて来たが、明治（1868～1912）の先哲の創意は漢字の妙味を実に巧く活かしている。

「概念」の「概」は斗斛（ますめ）の上を擦って平らにして量る「量概」で、延いて「量を量る」意に用いる。「念」は中国語で同音（nian）の「黏」（粘り着く）と通じて「常に思う」意で、或いは「今＝中のものを閉じ込める蓋」の解釈に基づく「心中に深く思う」説も有る。¹⁾ 日本では中国語由来の「概略」から「概要」「概覧」「概観」「概括」等の和製漢語が生れたが、個々の物事から共通性を抽出して出来た表象の内包（意味内容）・外延（適用範囲）を指す「概念」は、対象の表出（言葉）や内面（精神）の要略に対する概括を謂うには字・義俱に適合する。

「概念」も最初は英語の generalization に対応する倫理学の用語として、同じ和製漢語の「Term 名辞」等の新語と共に『哲学字彙』に逸早く掲載されたが、日本初の哲学辞典が果たした当該分野での先駆的な役割は辞書の重要性の好例と成る。題名から連想する中国初の画引き字書『字彙』（〔明〕梅膺祚編、1615）は100年後、最も権威有る字書とされる勅撰『康熙字典』（張玉書・陳廷敬等編、1716）に由って伝統が発揚された。

中国最古の部首別字書『説文解字』（〔後漢〕許慎編、100頃成立）は、中国文字学の基本的な古典として現代日本の漢字研究の第一人者白川静の探究欲を刺激し、字書3部作『字統』『字

訓』『字通』（平凡社、1984、87、96）の誕生に至らせた。漢字に対する形・音・義乃至史（成立・変容）等の解析は漢字の根幹に突き当たる発掘で、「概念」の字形に有る「既」「今・心」に因んで言えば、国語辞書を繙く事は言語・文化・社会の既成の常識と昨今の脈動を掴める効用が有る。

国語は言語に由る国民の表現手段として、社会生活の形而上的な基盤の中核と見做せる。国語辞書は言葉や国柄・時代等を映す鏡の様な一面も有るので、両国の諸相を照らし合せる手掛りにも成る。言語と文化とは鶏と卵との様な相互産出の関係に在るから、国語辞書の内容・有り形は日中文化比較の良い材料である。

日本初の近代的な国語辞典である『言海』は、国語学者大槻文彦が文部省報告課に在勤中の明治8年（1875）、近代国家の仲間入りに必要だと考えた政府の意向を受けて編纂し始めたが、9年掛りで完成したのに予算が無い所為で同省刊行の予定は御破算と成った。已むを得ぬ自費出版（全4冊、1889～91）以来1度も政府主導の国語辞書は出来た例が無く、英国を始め国家関与の国語辞書が盛んに作られた列強・先進国の中で稀有の部類に入る。

大槻文彦と改訂・増補を引き継いだ兄如電の相繼ぐ逝去（1928、32）後、『言海』の進化版『大言海』（本文4巻+別巻索引）が富山房より出た（1932～37）。同じ言語学者の金田一京助・春彦父子が多く为国語辞書の編者に名を連ねたのも、同じ言語学者・辞書編纂者の新村出・猛親子に由る『広辞苑』作りと共に、百年老舗の多い日本の職人氣質の根強さを物語る美談の様に思われる。

中国初の近代的な国語辞書『辞源』は清代光緒34年（1908）に編纂が発足し、日本より24年遅い民国4年（1915）に正編（2冊、陸爾奎等編）が[上海]商務印書館より出版された。代表的な国語辞書の主幹級編者の仕事が肉親に継がれて行った例も聞いた事が無く、恐らく中国的な個人主義や商人根性が日本の様な世代に跨る執着を妨げたのかも知れない。中国のスポーツ競技のお家芸は卓球・体操・羽球等の個人競技が多く、蹴球は全体に有利な場合でも選手が他人の為に走らない傾向が有るから強く成らない²⁾が、辞書編纂の様な自己犠牲が要求される長期的な集団作業には日本人の方が向いている。

尤も、「金田一京助編」と銘打った多くの辞書は1冊も本人が手掛けておらず、お人好し故彼方此方に名前を貸しただけだと長男春彦が内幕を明かした。東京帝国大学大学院生見坊豪紀が略独力で作った『明解国語辞典』（三省堂、1943）も、その師に当る推薦者京助の文学博士の肩書で集客したい出版社の判断に由る物である。³⁾日本ではこんな看板の偽装は年功序列や義理人情を重んじる善処として罷り通っていたが、性悪説に傾き勝ちの中国人から見れば「濡れ手に粟」の濡れ衣を着せられかねない。

『広辞苑』第6版（岩波書店、2008）の【劉希夷】の項は、「初唐の詩人。字は庭芝（廷芝とも）。河南の人。華麗な歌行をよくした。“年年歳歳花相似たり、歳歳年年人同じからず”の句は有名。

(榮元?)」と言う。^{くだり}件の名句は発表前に母方の親戚宋之間に自作として譲って貰うよう頼まれたが、断った為に宋の逆恨みを買って謀殺された。宋は同辞書の紹介の通り詩風が流麗・精巧で名高く七言律詩の確立に貢献した人物なので、歴史的な評価に関する両者の命懸けの激突から中国の「名」の文化が実感できる。

^{はんだうかずとし}半藤一利著『日本のいちばん長い日 運命の八月十五日』の初版(文藝春秋新社, 1965)は、勤務先である同社の営業上の都合で当該分野(記録文学)の^{ノン・フィクション}大家大宅壮一の編とされた。作者は一介の編集者から後に重役が与えられ数々の著書で世間の注目を浴びるに至ったが、退社の1995年に終戦50年記念の為に再版では漸く半藤名義の「決定版」の形と為った。同年から「第2の敗戦」が囁かれた日本は^{バブル}泡沫崩壊後の「失われた20年」を経て、1968年以降42年に亘って保ち続けた世界2位の経済大国の座を中国に奪われた。その間の日本社会の著しい変貌を「中国化」と捉える向きも現れたが、孔子の「当仁、不讓於師」(仁に当りては、師に譲らず)に見る中国的な無遠慮で行くなら、棄権時29歳、35歳だった見坊・半藤の礼讓は「談合の美德」と共に廢れるに違い無い。

「中国化」は元々ある国又は民族が言語・文化の面で中国に同化される事を意味し、中国の主体民族と為る漢族が域内や周辺の異民族を同化させる過程・結果を表すのが多い。こうした「漢化」の海外版として漢字文化圏内の他国への言語・文化の深い影響が有るが、曾て中国文化の感化を受けた朝鮮半島・日本・^{ベトナム}越南では中国化は^{かんか}患禍と見られて久しい。20世紀に中国と^{かんか}干戈を交えた日本・^{ベトナム}韓国・越南乃至血盟を結んだ北朝鮮では脱中国化が進み、最も抜本的な「断・捨・離」は朝・越・韓の漢字全廢又は略全廢(1949、50頃[北越]～75以降[全土]、70)に他ならない。^{ほぼ}4)漢字使用の点で不即不離の姿勢を変えない日本の疎遠の傾向を象徴するかの様に、『広辞苑』の【漢字】の子見出し(4点)には「漢字文化圏」は無く、【漢字音】【漢字コード】に続くのが【漢字御廢止之儀】【漢字制限】である。

歴史学者^{よな はじゆん}與那覇潤は『中国化する日本 日中「文明の衝突」一千年史』(文藝春秋, 2011)の中で、「中国化」「再江戸時代化」の概念を^{キー・ワード}鍵詞に日本史の検証・整理を試みている。前者は上記の文化的な意味と違って集権体制の確立や社会の競争の強化等を指すが、翌年11月15日に中共中央総書記兼軍事委員会主席に就任した習近平の異様な集権と、12月26日に首相再登板を果たした安倍晋三の強引な独走との類似性を見れば、西洋中心史観と一線を劃し東洋両大国を凝視する著者の問題提起は時宜を得た様に思える。1955年の「11.15」に結成した自由民主党は2度の下野を除いて長らく政権を握って来たが、「55年体制」発足の年に^{うぶこえ}産声を上げた『広辞苑』は内容と有り^{かた}形の両面から、言語・文化に於ける現代日本の中国化を阻む障壁の高さ・堅さが窺える。

中国の「名」の文化・現世至上主義に由る功利追求の執念・貪欲

「自序〔第一版〕」の末尾の「昭和三十年 一九五五年 一月一日/京都 新村出」には、順番及び活字の寸法に由って西暦より年号を尊ぶ情感が表れており、居住地の明記に由って**在野の立場を誇る矜持**が滲み出ている。「われら父子」（自分と次男猛）への「誇称」をも惜しまぬ成功宣言もこの1回で終り、彼の元祖は第2版刊行（1969）の2年前に他界した。新村猛を中心に編修を進めた第3版の刊行（1983）の翌年に、^{フランス}仏蘭西文学者である父を^{たす}援けて作業に携った息子^{とおる}徹（中国文学者）が急逝し、猛も第4版刊行（1991）の翌年に物故し3代に亘る献身に終止符を付けた。初版の序で老父から辞書編集の情熱・経験・智識・感覚が延々と絶賛された彼は、実際の役割に反して1度も編者として表紙や^{おくづけ}奥付に名を飾った事が無く、第5版（1998）の10年後に出た現行版でも「新村出編」の儘と為っている。

日本語の「奥付」は末尾に付す副次的な^{イメージ}形象を字面に持ち、**権利の主張を盾としない奥床**しさが感じられる。対応する中国語の「版權頁」及び洋書と同じく^{しばしばタイトル・ページ}屢々題名頁の裏面に印刷される位置は、**欧米人並みに強い中国人の権利意識の表出**と見て能い。唯一の初代編者の冠名が死後5回の改版で排他的な形を維持し続けた事は、先人の偉業を顕彰し伝統を堅持する高尚な動機が有るとしても中国の常識では納得し難い。墜ちた巨星に対する同時代中国の究極の礼遇として、「人民の大救星」（人民の大いなる救いの星）とされた毛沢東の例が挙げられる。鄧小平は彼の死去4年後の1980年8月に生前の誤りを批判しつつも功績を高く評価し、天安門城楼に掛っている毛主席の肖像画は永遠に外すまいと伊太利の^{イタリア ジャーナリスト}報道人ファラーチに語った。「死せる孔明、生ける仲達を走らす」様な呪縛力を持つ毛の亡霊の^{さまよ}彷徨いが許されても、その天安門の「顔」は行事で城楼に立つ権力者の足下に当り所詮「虚星」（造語）に過ぎない。

3代世襲を断行した朝鮮民主主義人民共和国の「金家王朝」では、現指導者は先代に対して喪を服しその職位（例えば^{キムイルソン}金日成の国家主席）を専用の物として継承を避けるが、中国語で「**権利**」と同音・同声調（quánlì）の「**権力**」に対する貪欲も有って、故人の独占的な地位の世代を超える名・実両面の永続的な踏襲は考え難い。二月河著歴史小説『^{けんりゅう}乾隆皇帝』第6巻『秋声紫苑』（河南文芸出版社、1999）に、退位の兆しが出た時点で宦官が乾隆に最上級の^{かんがん}新茶を淹れるのを止めるという場面が有る。皇室専用の献上茶の中でも重宝される旬の新茶を次期皇帝予定者の15男に振り分けられ、お茶の通である彼は季節（秋）外れで鮮度が落ちた春の茶に甘んじる羽目に成った。^{はめ}5) 人が離れると疎遠に成る譬えは「人一走，茶就涼」（人が去れば，茶は直ぐ冷める）と言うが、「盛清」（「盛唐」^{なぞら}に擬え最盛期の^{しん}清朝を指す造語）に1735年から60年天下を君臨し続け、太上皇（退位した存命の帝の尊称）に成った後も死（1799）まで院政を敷いた乾隆は^{ここ}此処で、「人未走，茶已涼」（人が^ま未だ去らない内に，茶は^{すで}已に冷めて^{しま}しまった）という待遇を受けた事に成る。胡錦濤の退任を待たずに政界で次期党首習近平に靡く風潮が起

きたのも歴史の再演であり、この様な精神風土の中で過去の人の権威を守る為に自らの栄光を犠牲にする者は珍しい。

中国の春節（旧正月）と日本のお盆に同じく帰省の民族大移動が起きるが、先祖の墓参りではなく家族団欒を最重要とする中国流は現世至上主義の生き方の現れである。今の人間・生活を一番大切にする一般的な中国人の現実的な価値判断に由って、中国では高邁・玄妙な宗教・信仰（例えば禅や共産主義）の普及・定着も難しいし、観念上・歴史上の神・帝や特定分野の巨匠に対する尊崇も社会・時代の変移に連れて薄れ易い。毛沢東は「文化大革命」（1966～76）中の個人崇拜で官民から超絶の礼賛を捧げられたが、その「我們心中永遠不落の紅太陽」（我々の心の中の永遠に沈まぬ赤い太陽）の没後は一変した。高級幹部は死後火葬に付すという合意書（1956）に率先して署名した彼の遺志に反して、党中央に由り遺体の永久保存が決定され安置の施設として毛主席記念堂が建造されたが、極「左」色の強い『毛沢東選集』第5巻（人民出版社、1977）は僅か5年で発売中止と成り、「我們千秋万代高举毛沢東旗幟前進！」（我々は千年万年、毛沢東の旗幟を高く掲げて前進する！）等と謳う新国歌も、華国鋒時代の制定（1978）から4年しか持たず鄧小平時代に廃止された。

毛沢東の指名に由り55歳で國務院総理に就任し党中央・軍委主席を引き継いだ華国鋒は、実績・声望とも乏しい故に先代領袖の看板を笠に着て基盤を強化しなければ成らなかった。「拉大旗，作虎皮」（大きな旗を虎の皮と看做す）と形容できる様な虎の威の借り方は、体裁の好い表現に直せば西洋流で言う「巨人の肩に乗る小人」の在り方が思い当る。英国の物理学者・天文学者・数学者ニュートンは毛の死去の300年前（1676）の書簡で，“If I have seen further, it is by standing on ye shoulders of Giants.”（私が彼方を見渡せたのだとすれば、それは巨人たちの肩の上に立っていたからです）と書いた。⁶⁾ 12世紀の仏蘭西の哲学者シャルトルのベルナルドゥスが言い出した「巨人の肩の上に立つ小人」は、昔の人々によって能力等が高められた現代人の「我々」の謙称である。⁷⁾ 建国の父の肩車^{かき}で嵩上げられた華国鋒は錦の御旗^{みはた}を掲げて非力の所為^{せい}で大権を乗っ取られ、その上に登った最高実力者鄧小平と新党首胡耀邦は文字通りの「矮人」である。鄧は胡と後任の趙紫陽を斬って江沢民を後釜に据え更に胡锦涛をその後継者に決めたが、中共政權の首脳に限らず中国史上の君主もこの様な重疊^{ちようじよう}の頂上に坐る者が多い。

「小人・矮人」と並ぶ訳語の「侏儒」の字形中の「朱・需」は「紅の党」の需要^{もとめ}を思わせるが、1980年代の毛沢東の「走下神壇」（神棚から歩み下りた）⁸⁾とは時の指導部に降ろされた感が強い。中共の「章程」（規約）に記されたマルクス・レーニン主義以外の指導原理は、第9回党大会（1969）からの「毛沢東思想」に、鄧小平逝去直後の第15回（1997）からの「鄧小平理論」、江沢民総書記退任の第16回（2002）の「“三個代表”理論」、胡锦涛の同職退任の第18回（2012）の「科学發展觀」が順次追加された。4代の指導者の思想→理論→個別理論・觀は

次第に小物化して来た印象を否めないが、自らの執政の画龍点睛と為る表徴を党の綱領に残そうとする凄まじい執念は、「人過留名、雁過留声」（人は立ち去りて名を遺し、雁は飛び去りて声を残す）という名声欲に基づく。『広辞苑』にも【虎は死して皮を留め、人は死して名を残す】の項目が有り、死後その「皮」（表紙）に遺り続けて来た初代編者の名はこの上無い声価と言えるが、中国では大きな節目で「党章」を修正する度に新顔が添えられた事のように、開祖・長老の神格性も後進を埋没させない前提で容認されるのである。

強力な治世で毛沢東・鄧小平に追いつき又追い越そうとしている習近平は、2015年9月3日の抗日戦争・世界反ファシズム戦争勝利70周年の大閱兵で、天安門城楼の真ん中に立ち左横に江沢民（89）・胡錦濤（72）が並ぶ形を許した。次世代延いてはその次の世代の類似の場合に自ら登場できる為の布石かと推測できるが、名誉の裾分けを受けた退役者はあくまでも現役者を引き立てる脇役でしかない。中国では歴史の怨念に関して件名を付けて保存し永久に消さない傾向が強いが、功名の競争では他人のものに対する上書きや修正・書き添えが盛んに行われている。古代の書画の名作には好く皇帝をも含む収蔵者が印を捺したり詩文を書いたりしており、この様な割り込みは「揚名」（名を揚げる）・「伝世」（後世に伝える）意識の発露と解釈できる。毛沢東讚歌『瀏陽河』（湖南民謡、作詞者未詳）の「世界把名揚」（世界に名を轟かす）は、世界に伝播する意の変種の「伝世」も含まれている。これ程自らの名の宣揚に余念が無い中国の権力者や知識人にとって、他国の代表的な国語辞書の新版の唯一の編者名が物故者であり続ける事は到底理解できない。

日本語の「曖昧・婉曲」の特質と中国文化に対する受容の独自性

紀貫之・紀友則・凡河内躬恒・壬生忠岑撰『古今和歌集』（905か914頃成立）を始め、古代・中世の日本の和歌集では作者が不明か開示し難い場合に「詠人知らず」と記される。この扱いの対象は本当の未詳や家集（個人の歌集）で匿名と為った場合の他に色々有り、読者の宮廷人に見下される身分の低い人の作も勅を發した天皇や上皇自身の作も含まれる。皇族所縁の出自・身分の人物や失脚した人物の名の公表を憚る政治的な判断や、特定の歌人の入選数が多過ぎる様に見える為の編集上の均衡感覚も、敢えて氏名を伏せる理由として挙げられている。⁹⁾ 現代では作者が判明していない場合は「作者不詳/未詳」と記載するのが普通であるが、未だ詳らかでない・正確な事が判らない意の前者は猶究明しようとする含みを持ち、詳らかでない・詳しく判らない意の前者は究明の意思や可能性が最早無い様な響きも感じる。「知らず」は同じく不可知を表す「不詳」に近く中国語の「不知（道）」と通じるが、遠慮深い日本人は質問に対して突き放す様な印象が付き纏う「（私は）知りません」を避け、婉曲表現の「（私には）判りません」と答えるのが作法と為っているので、「判らず」ならぬ「知らず」は些か冷厳・

生硬で複雑な語感を帯びる。日本語は『広辞苑』の【不詳】【未詳】の用例の「作者—」「年齢—」「没年—」の様に名詞のみの熟語が発達し、和歌・俳諧等で多用される体言（名詞・代名詞）止めは現代文でも技法的に好く使われるので、曖昧な日本語で能く省略される主語・述語が揃った「詠人知らず」は余計に興味を引く。

『古今和歌集』成立の頃に終焉した唐代（618～907）の漢詩の選集の表記と比較する時、先ず両国で知名度の最も高い^{テキスト}版本の違いに由って文化の受容から生じた^{ギャップ}懸隔に遭遇する。『広辞苑』の【唐詩】の「①漢詩。からうた」に次ぐ「②唐代の漢詩。すなわち絶句・律などの近体詩で、この時代にその形式が大成、優れた作家が輩出した」の唯一の関連項目は【唐詩選】で、「唐代詩人一二八人の詩選集。七卷。選者は明の李攀竜^{りはんりゆう}という疑う説もある。五言古詩・七言古詩・五言律・五言排律・七言律・五言絶句・七言絶句、総計四六五首を収録。初唐・盛唐に傾き、中唐・晩唐の詩をほとんど収めない。日本には江戸初期に渡来し、漢詩の入門書として盛行」と詳解されている。中国で人口に膾炙するのは[清]蘅塘退士（孫洙）編『唐詩三百首』に他ならず、「熟読『唐詩三百首』、不会作詩也会吟」（『唐詩三百首』を熟読すれば、詩が作れなくても吟える）という熟語が有る¹⁰程である。『広辞苑』には【読書百遍義自^{うた}おずから見^みゆる】の慣用句が立項してある（＝「[三国志魏志、王肅伝、注] どんなに難しい書でも何度もくりかえして読めば、意味が自然に明らかになる。熟読の必要を説いた言葉。“読書百遍義自^{うた}おずから通ず”とも）が、中国で熟読百遍の得の手本と為る『唐詩三百首』は圏外に置かれている。扱って置き、『唐詩三百首』の310首の作者（77人）中の氏名不明者は『唐詩選』と同様の「無名氏」と記された。

「打起黄鶯兒，莫教枝上啼。啼時驚妾夢，不得到遼西。」（黄鶯兒を打起し、枝上に^な啼かしむること莫れ。啼く時妾が夢を驚かし、遼西に到るを得ざらしめん）という五絶「春怨」は、『唐詩三百首』では金昌緒の作とされ『唐詩選』では無名氏作「伊州歌二」と記されている。『唐詩選』中の無名氏作七絶「伊州歌一」・「初過漢江」（初めて漢江を^{よぎ}過る）・「胡笳曲」（胡笳の曲）は『唐詩三百首』には無く、『唐詩三百首』を結ぶ楽府「金縷衣」は表記の杜秋娘が誤りで無名氏の作と言われる¹¹が、^と兔^{かく}に角「無名氏」は「詠人知らず」に当る中国語として使用履歴が長い。この漢単語は『広辞苑』で「名の分からない人。失名氏」と説明され、【失名】（＝「氏名のわからないこと」）の内の【失名氏】は、「氏名のわからない人。なにがし。無名氏」と為っている。『日本国語大辞典』第2版（本文13巻＋別巻〔漢字索引・方言索引・出典一覧〕、日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編集、小学館、2000～02）の【失名氏】は、「《名》名前のわからない人を示す時などに、その人の名前のように用いる語。なにがし」と解釈され「《名》＝名詞、【失名】（＝「《名》名前がわからないこと。名を忘れること）」と同様に、「女工哀史（1925）〈細井和喜蔵〉」の用例のみが付いているが、同じく国内最大規模を誇る国語辞書の『漢語大詞典』（本文12巻＋附録・索引、羅竹風主編、漢語大詞典編輯委員会・

編纂処編纂, [上海] 漢語大詞典出版社, 1986～94) では, 【失名】は「①喪失名節。②指名場失利」(①名節を失う。②受験で失敗する事を指す)の両義で, 其々「明陳子龍《〈七録齋集〉序》」等2点、「唐孟郊《長安羈旅行》」の出典が引いてある(下線は時代・人名の記号)ので, 「失名氏」は「失名」の和製語義に基づいた和製漢語なのである。古代中国語の「失名」は人名の逸失・忘却を言う現代日本語の意に対して, 両義及び出現時期の順序から名利に敏感で且つ仁義を重んじる国柄が垣間見える。

『日本国語大辞典』の【無名氏・無名子】(語釈=「(名)名のわからない人を示す時などに, その人の名前のように用いる語。失名氏」)の次の【無名指】は, 「(名)くすりゆび。ななしゆび。むみょうし」の意であり, 『広辞苑』の同項目の「くすりゆび。べにさしゆび。ななしゆび」とは異称が1つ違う。「刺青(1910)〈谷崎潤一郎〉」「破片(1934)〈寺田寅彦〉」から採った用例の他に, 漢籍出典の「孟子-告子・上“今有_レ無名之指屈而不_レ信, 非_レ疾痛_レ害事也(略)〈注〉無名之指手之第四指也。蓋以其余指皆有_レ名。無名指者非手之用指也”」と有る。儒家の教典と為る「四書」の中で『大学』『中庸』『論語』に次ぐ『孟子』の冒頭は, 「孟子見梁惠王。王曰:“叟!不遠千里而來, 亦將有利吾國乎?”孟子對曰:“王!何必曰利, 亦有仁義而已矣。”(孟子, 梁の惠王に見ゆ。王曰く, 「叟, 千里を遠しとせずして來る。亦將に以て吾が國を利する有らんとするか。」孟子對えて曰く, 「王何ぞ必ずしも利と曰わん。亦仁義有るのみ。」¹²⁾)と為っている。「後義而先利」(義を後にして義を先にする)に対する孟子の否定は, 荀子の「先義而後利」(義を先にして利を後にする)の提言と同じ主旨であるが, 「梁惠王章句上」のこの書出しに於ける「利→義」の登場順は, 「失名」の「名場失利」→「喪失名節」の両義の時代順と一致する。「名場」「失利」は日本語に入っていないか意味が変わった上で死語と化したので, 単語の有無・異義・存廃等から両国の言語・文化乃至社会・時代の位相の違いが見て取れる。

「名場」は功名の競争を行う科挙(官僚登用試験)の会場であり, 制度が発足した隋代(581～619)に次ぐ唐代の詩文にも好く出ているが, 日本では科挙の真似をしなかった為かこの言葉も取り入れていない。中国でも清末の制度廃止(1905)に伴って現代では何時からか使われなく成ったが, 代りに「利」との複合で輪を掛ける様な「名利場」が派生されている。中国の最も権威有る中型国語辞典『現代漢語詞典』の第6版(中国社会科学院語言研究所詞典編輯室編, 商務印書館, 2012)では, この中国独特の熟語は「名指世人争名逐利的场所」(名世間の人が名声を争い利益を逐う場所を指す)と説明されている。該当の日本語の「虚栄の市」は『広辞苑』の講釈の通り, 「(Vanity Fair) ①パニヤンの寓意小説『天路歷程』に描かれる市場の名。②サッカーの小説。一八四七～四八年刊。ヴィクトリア朝の各階級の生活の諸相を, ベッキー=シャープという悪女を軸にして諷刺的に描く。③ニューヨークで一八五九～六三年に刊行され, 世相の諷刺を得意とした人気週刊誌。また, 同名の月刊誌(一八六八～一九三六年刊行)も著名」という多義を持つ。『日本国語大辞典』の同項目は規模の圧倒的な大きさに反して②

の意しか無いが、「(原題 英 Vanity Fair) 長編小説。サッカレー作。一八四七～四八年刊。虚栄にみちた、人間の俗物性を風刺したもの。作者の代表的作品」という解説は、題の直訳の正統性を示すと共に英文と乖離した中国風の意識を味わう手掛りに成る。又『広辞苑』の②と違う「風刺」の言偏抜きやその文の体言止め、乃至「みちた」の漢字「満」の回避や「俗物性」の指摘に就いても、「名利場」や関連の中国語の表現・発想と絡めて掘り下げる価値が有る。

対称・整合性の好みや「名勝」単語群に見る発想の「錯位」と通底

『日本国語大辞典』の【虚栄】は「(名)①実質の伴わない外見ばかりの榮譽。②うわべだけを飾って自分を実質以上によく見せようとする。みえ」の両義で、前者は由来の「柳宗元-遊石角過小嶺至長烏村詩“為_レ農信可_レ楽_レ居_レ寵真虚栄”」が有り、後者は「虞美人草(1907)〈夏目漱石〉一九」等から採った2点の用例が有る和製語義である。①の初出「西国立志編(1870-71)〈中村正直訳〉一〇・一九“塵世の虚栄を薄んじ、来生の真福を望み”」は、西洋文化と対応する為に明治の知識人が漢籍から借用した多くの漢単語の1例である。次の【虚影】(語釈=「(名)実体の反映として存在するもの。また、実在しないのに実在していると錯覚しているもの。まぼろし」)の唯一の用例も、同じ文献中の「一・三“蓋し人民は政事の実体にして、政事は人民の虚影(〈注〉ムナシキカゲ)なり”」である。漢籍典拠の「張華-情詩其一“襟懷擁_レ虚景_レ、輕衾覆_レ空牀_レ”」の「虚景」とは対応せず、同辞書には「虚景」の項も無いので敢えて引いて和製漢語にしない扱いは訝れるが、和製漢語「実体」と対を成す為「虚景」を媒介に考案したのなら漢学力と創造力は感心に値する。『現代漢語詞典』に無い「虚景」は『漢語大辞典』では、①(—jǐng)想像中的景物。②(—yǐng)幻影、影子」(①(—jǐng)想像上の景物。②(—yǐng)幻影、影)の両義と為り、出所として其々「晋張華《情詩》之三：“佳人処遐遠，蘭室無容光。襟懷擁虚景，輕衾覆空牀。”(「之三」と上記「其一」との違いに留意したい)等2点、「晋陸雲《九愍・紆思》：“顧虚景而端景，矧同波于其醉。迨伊人之逍遥，聊仰葉于林側。”」が有る。虚しき影の意なら②の出典の借用・引用が筋に合うが、同じ晋代(265～420)の詩文から別の語義の「虚景」を持って来るのは愉快的筋違いである。

日本に於ける中国の言語・文化の移植で多々有ったこの種の「錯位」(位相の交錯・倒錯)は、「移花接木」(花が咲いている木を別の接ぎ木にする。転じて、秘かに人や物をすり変えることを譬える)という熟語を連想させる。木偏の字を含む漢単語の例として「概略」の変容が思い当たるが、『日本国語大辞典』の当該項目(語釈=「(名)物事のだいたいのところ。あらまし。概要。大略。副詞的にも用いる」)では、用例(6点)中の初出と3番目の表記は篆体の「槩」(出所=「読本・椿説弓張月[1807-11]拾遺・附言」「西洋道中膝栗毛[1870-76]〈仮名垣魯文〉六・下」)である。尤も、漢籍典拠の「新唐書-郝処俊伝“及_レ長好_レ学、嗜_レ漢書_レ、厓略暗誦”」

では木偏さえ出していない。中国語の多くの古い言葉は様々な異色・異形の変異を経て日本語で生れ変わったが、屈折した経路で現れた「虚影」に対して和製語義の「虚榮」は「真福」の対として世に問われた。「虚影」と俱に『広辞苑』に無いこの和製漢語は、『日本国語大辞典』で「(名) 真実の幸福。まことのしあわせ」と説明され、「西国立志編 (1870 - 71) 〈中村正直訳〉一〇・一九“心志高尚にして、塵世の虚榮を薄んじ、来世の真福を望み”」が唯一の用例と為る。【虚榮】^②の初出と同じ文献なのに「心志高尚にして、」が添えられ、「来世」も音・字とも違う「来生」とは不一致で奇異に思われる。「虚・真」「榮・福」や「塵世・来生」又は「塵世・来世」乃至「薄んじ・望み」から、原文の制約を超えて対を求める漢字文化の拘りと多少の非対称を好む日本的な感性が見られる。

『日本国語大辞典』の【虚榮心】(語釈 = 「(名) うわべだけを飾ろうとする心。自分を実質以上によく見せようとする心」)の用例(3点)中、初出の「地獄の花(1902)〈永井荷風〉六“又一方には実に限りなく燃え上る虚榮心に駆られて”」は、精神の先行を現すかの様に【虚榮】^②の初出より5年早い。2語の出現は日露戦争(1904 ~ 05)前後の日本の背伸びや高揚感と結び付ければ面白いが、21世紀初頭の中国の「虚飾の繁榮」も際限無く燃え上がる誇示願望に駆られた結果である。「概念」の「概」は「氣概・節概・勝概」の様に人物や風景にも用いると『字統』では言うが、この3語の1字目の組み合わせである「氣節」と「勝氣」との関連も興味深い。前者は『広辞苑』の「①氣概があつて節操の堅いこと。氣骨。②氣候または時節」の様に、日本語では同じく人柄・自然を表す両義が有る(②は和製語義)が、『現代漢語詞典』では「^名堅持正義、在敵人或圧力面前不屈服の品質」(「^名正義を堅持し、敵や圧力の前で屈服しない資質」)の1義で、用例の「民族～|革命～」(「民族の氣節」「革命的な氣節」)は現代中国に満ちた抗争の色彩が強い。和製の後者は中国語で言う「争強好勝」(負けん気が強い)の氣概と字面に対応するが、『広辞苑』『現代漢語詞典』に無い両言語共通の「勝概」の「勝」はこの文脈で示唆に富む。

『日本国語大辞典』の【勝概】の語釈は「(名)すぐれた景色。勝景」で、漢籍出典の「李白 - 姑熟亭序“嘉名勝槩,自_レ我作也”」が掲げられている。用例の初出「本朝文粹(1060頃)九・宇治別業即事詩序〈大江以言〉」でも「勝槩」に作り、『現代漢語詞典』の【概(*槩)】の見出し語に異体字として併記された古代漢語の表記への踏襲を思わせる(5点中の3番目「黄葉夕陽邨舍詩 - 前編 [1812] 七・常遊雜詩十九首」から「勝概」に成り、直前の「読本・椿説弓張月 [1807 - 11] 拾遺・附言」の中の「槩略」との違いが興味深い)。近義語として挙げられた「勝景」は「(名)風景がすぐれていること。けしきがよいこと。また、すぐれてよいけしき。絶景。勝形。景勝」の意で、「元好問 - 遊華山詩」が由来と為るこの単語は『広辞苑』にも『現代漢語詞典』にも有る(其々 = 「すぐれてよいけしき。絶景」)「^名優美的風景:園林～|佳卉娛目、～怡情」)「^名優美な風景。「庭園の勝景」「美しい花は目を楽しませ、素晴らしい景色は心を和

ませる]])。同義語の「景勝」は『日本国語大辞典』の項(語釈=「(名)景色がすぐれていること。また、その土地」)では、「葉清臣-送梵才帰天台詩」の漢籍出典の他「旅-昭和五年(1930)八月号・八月は海へ」の用例しか無いが、『広辞苑』には有り(=「景色のすぐれていること。また、その土地。“一の地”」)『現代漢語詞典』には無い。【勝景】で「景勝」と共に近義語に挙げられた「勝形」は同辞書で、「(名)地勢や風景などがすぐれていること。また、そのような土地。勝景。形勝」と説明され、3点の用例と漢籍「晉書-赫連勃勃載記」の典拠が有るが、『広辞苑』『現代漢語詞典』には入っておらず「形勝」と対照的である。後者の『広辞苑』の項は「地勢や風景のすぐれているところ。また、その土地。“一の地”②要害の地」で、『日本国語大辞典』の項も「(名)①(形動)地勢や風景などがすぐれていることやそのさま。または、そのような土地。景勝。②地勢が、敵を防いだり陣地を張るのに適しているところ。要害の地」の両義と為り(「形動」=形容動詞、其々「南史-劉善明伝」「史記-高祖紀」が出典であるが、『現代漢語詞典』では「〈書〉形地勢優越壯美(地勢が優れて壯美の観が有る)の1義で、「山川~|~之地」(「山川形勝」「形勝の地」)という用例も付いている。語順や使用頻度の違いが有っても「勝」を構成要素に絶景等を表す単語が多い事は、繊細な「優美」も豪快な「壯美」も「優・勝」の相関に関する事を物語っている。

「形勝」の近義語「勝地」は『日本国語大辞典』では、「(名) (“しょうじ”とも)①地勢がすぐれていて、ある事を行なう場所として最も適した土地。形勝の地。②景色のよい土地」の意に、其々「管子-七法」「新唐書-馬周伝」の典籍が示されている。『現代漢語詞典』では「名有名景風景優美的地方」(名有名な景色が優美な処)の1義であるが、用例の「避暑~」はその両義を兼ねるものとして解釈できる。『広辞苑』の「①けしきのよい土地。名勝。名所。②何かを行うのに適した土地」には、その「勝」と「有名」とを直結する「名勝」が①の近義語が提示されている。該当項目では「①景色のかぐれた地。勝地。“天下の一”“一を訪ねる”」の次に、「特に風致景観がすぐれ、学術的価値が高いものとして文化庁が指定した地」という1919年に始まった本国の事象が記されている。対して『日本国語大辞典』の【名勝】の両義は、「(名)①景色のすぐれた地。風光明媚で知られる場所。勝地。名所。②人望があつて名声の高い人。名望のある人。名士」である。其々「北齊書-韓晉明伝」「晉書-王導伝」に由来し和文の初出は②の方が早い(①の「西洋聞見録[1869-71]〈村田文夫〉前・中」の400年余り前の「百丈清規抄[1462]四)が、『現代漢語詞典』では「名有古跡或優美風景的著名地方」(名古跡或いは素晴らしい風景の有る著名な場所)の語義だけである。声望が高い名士の意味の退場は「名」の文化」の伝統に鑑みれば不思議に思われるが、古跡や美景が有る名所の観光資源としての価値から虚名より実利を重んじる時流も感じる。巡り巡って和製漢語「真福」と派生元の「虚榮」との対に絡んで来るが、古代漢語の「虚景」から和製語義の「虚榮」が捻り出された事は「名勝」の有り形に繋がる。この単語の「名・勝」の複合と中国語で「名声」

と同音 (mingsheng) であることは、中国の「名」の文化」のみならず両国の功利意識を論考する切り口に成る。

「豹死留皮，人死留名」の集団的な価値観・美意識と「和化」移植

『広辞苑』の【虎】の内の慣用句【虎は死して皮を留め，人は死して名を残す】は、「虎が死んでもその皮が珍重されるようになり，人は名誉や功績によって死後も名を残すように心がけよということ」と説明されている。【豹】の中の成句項【豹は死して皮を留め，人は死して名を残す】は、「[五代史王彦章伝]“虎は死して皮を留め，人は死して名を残す”に同じ」と為っている。『日本国語大辞典』の【虎】の子見出し【とらは死(し)して皮(かわ)を=残(のこ)し [=留(とど)め] 人(ひと)は死(し)して名(な)を=残(のこ)す [=留(とど)む]】は、「獣の王者である猛虎は，死後も皮となって珍重されるが，人はその死後に残した名誉や功績で評価される。人は死して名を残す」と解釈され、「古来風体抄(1197)上」「十訓抄(1252)四・行基菩薩遺言誠多言事」「警諭尽(1786)一」の用例が引いてある。【豹】の内の【ひょうは死(し)して皮(かわ)を留(とど)め人(ひと)は死(し)して名(な)を留(とど)む】は，語釈の「豹は死後皮となって珍重されるが，人は名誉、功績を残して評価される。虎は死して皮を残し人は死して名を残す」の他に用例が無く，漢籍出典の「歐陽脩－王彦章画像記“平生嘗謂人曰，豹死留皮，人死留名”」だけが示されている。【人】の中の【ひとは死(し)して名(な)を=留(とど)む [=残(のこ)す]】の項(語釈=「死後に名誉や功績を残し伝えるべきである。虎は死して皮を残す」)には、「足利本論語抄(16C)衛霊公第十五」「落語・転宅(1889)〈二代目古今亭今輔〉」の用例，及び漢籍出典の「埤雅－积豹“豹死留皮，人死留名，故君子疾没世而名不称焉”」と有る。一連の熟語から中国の「名」の文化」に対する吸収・発展が見受けられるが，用例・見出し語の用字や見立ての動物には「和化」(「漢化」を振った造語)の跡が鮮明である。

『日本国語大辞典』の【虎は～】の12世紀末～18世紀末に跨る3つの用例は、「とらはしにてかはのこす。人はしにて名をとどむ」「虎は死して皮を残し，人は死して名を残す」「虎は死(シ)して皮(カハ)を留(トド)め人(ヒト)は死(シ)して名(ナ)を留(トド)む」である。初出の文は日本人好みの仮名多用と表現・表記の非整合性を略最大限に発揮し，「とら・人」「かは・名」の仮名対漢字だけでなく「のこす・とどむ」も片方の助詞が無い。「は」「しにて」の前後同一も全て不統一という整合に成らない変則の感じを帯びて来るが，漢文調の「死して」で「しにて」に取って代った半世紀後の進化型は中国風に見えながらも，皮・名を「残す」という中国語の「残」に無い使い方に日本語の異形を見せている。古今の漢語では「残」は動詞として「損なう」「殺す」「滅ぼす」「傷付ける」「毀す」「崩れる。破れる」の意で，形容詞

として「凶暴な。荒い」「不完全な」「余っている」「尽きようとしている」「残っている」の意である。『日本国語大辞典』の「のこ・す【残・遺】《他サ五(四)》」の「**②**①人が立ち去ったあと、また、死んだ後にとどめておく。後世に伝える」の用例(6点)中、最初の「*万葉(8C後)一八・四一一一“時じくの香(かく)の木の実を畏くも能許之(ノコシ)たまへれ”〈大持家伴〉*大慈恩寺三蔵法師伝院政期点(1080-1110頃)一“範(のり)を当代に貽(ノコシ)軌(あと)を将来に訓(さと)らしむるに足れり”」の後に、「平家(13C前)五・富士川「院宮の往詣いまだきかず。禪定法皇初て其儀をのこい給ふ」」を経て、「徒然草(1331頃)三八“うづもれぬ名をながき世に残さんこそ、あらまほしかるべけれ”」と「残」が出たが、次の「*尋常小学読本(1887)〈文部省〉六“父の、汝を遺し給ひしは、汝の幼くて、死に就くをあはれむが為めに非ず” *草枕(1906)〈夏目漱石〉一二“昔し巖頭の吟を遺して、五十丈の飛瀑を直下して急湍に赴いた青年がある”」では「遺」と為る。「**同訓異字**」のこす【残・遺・余・剩・貽】の解説の通り、「【残】(ザン)」は「細かくきる。そこなう。転じて、全部なくさないでのこす。また、終わりに近づいた状態でのこす。“残雪”“残念”“敗残”《古のこる・のこす・あまる》」,「【遺】(イ・ユイ)時間的に後にのこす。“遺産”“遺跡”“遺言”“後遺症”《古のこる・のこす・とどむ・おくる》」なので、「死して」の皮・名の存続は本来「遺」の方が規範的なはずである。更に5世紀以上経って中国語と同じ「留」が使われるに至ったが、【人ほ〜】の「君子は身没して後までも名誉を称せられぬことを憂ぞ人は名を止め(トト)也 虎は皮止(とどむ)」「人は一代名は末代、人は死して名を残し虎は死して皮を残す」は、前者の「止」は「残」よりも中国語と懸け離れており、後者はこの場合の「遺」に対する「残」の優位を印象付けている。

同辞書の「とど・める【止・停・留】」は『広辞苑』の同項目の【止める・留める・停める】とは順番が違うものの、俱に中国語で発音が別々(zhǐ, tíng, liú)の字を一緒にしている。「残・遺」(cán, yí)の同様の扱いと共に中国人に強い違和感を覚えさせる有り形で、見出し語に異体字以外の併記をしない中国の国語辞書の規則とも次元が異なる。この種の混在と同工異曲の日本的な曖昧さは上記熟語群の見出し語等にも垣間見えており、『広辞苑』の【虎は死して皮を留め、人は死して名を残す】と『日本国語大辞典』の【とらは死(し)して皮(かわ)を=残(のこ)し [=留(とど)め] 人(ひと)は死(し)して名(な)を=残(のこ)す [=留(とど)む]、及び【ひとは死(し)して名(な)を=留(とど)む [=残(のこ)す]】とは、「留」か「残」かの選択・配置と併用の有無で其々微妙に違う。【豹は死して皮を留め、人は死して名を留む】と【ひょうは死(し)して皮(かわ)を留(とど)め人(ひと)は死(し)して名(な)を留(とど)む】とは実質的に一致するが、理由として考えられる原典尊重の姿勢も両辞書の典拠の相違に技術的な食い違いが有る。『日本国語大辞典』の【ひとは死(し)して名(な)を=留(とど)む [=残(のこ)す]】の漢籍は、同じ「豹死留_レ皮、人死留_レ名」を含んでいながら出所が上記2点とも無関係である。元の豹の見立てを活かさず虎を見立てに和製熟語を

作ったのも日本化の1環であろうが、^{アフリカ}阿弗利加から中国・朝鮮にかけて分布する豹に対する実感の無さが1因かも知れない。『日本国語大辞典』の【虎】^ニ〔名〕^一「ネコ科の哺乳類。(下略)」の用例(6点)中、『広辞苑』の同項の①の出典「万一六“韓^コ国の一と云ふ神を”」と重なる2点目(「万葉[8C後]一六・三八八五“韓国の虎(とら)と云ふ神を生取りに八頭[やつ]取り持ち来(乞食者)”」)の前に、「書紀(720)天武朱鳥元年四月(北野本訓)“戊子,新羅の進む調,紫築より貢上(たてまつ)る。〈略〉霞錦・綾羅(うすはた)・虎(トラ)豹皮(おかつかみのかは)及び菓物の類,并て百余種”」と有るが、日本では「君子豹変」の俗化と通じる様に豹の皮の真価に対する評価は^や稍足りない。

『日本国語大辞典』の【豹変】は、「〔名〕(『易経-革卦』の“上六,君子豹変,小人革^レ面”による語。豹の毛が季節によって抜け変わり,斑文も美しくなるように,君子は時代の変化に適応して自己を変革する,また一説に,善人は心から過ちを改め善にうつる,という意から)境遇・性行や態度・意見などが,がらりと変わる事。元来は善い方になる意であるが,転じて,悪い方になる場合,無節操な態度などにも用いられる」と詳解され,「扶桑集(995-999頃)七・右親衛源沓将軍丞見賜新詩〈略〉赦献鄙懐〈橋在列〉」～「墮落(1965)〈高橋和巳〉三・三」の用例が挙げられている。【君子】の内の【くんしは豹変(ひょうへん)す】の語釈は,「(『易経-革卦』の“君子豹変,小人革^レ面,征凶”による)君子はあやまちを改めて善に移るのがきわめてはっきりしている。君子はすぐにあやまちを改める。今日では,節操なく変わり身の早いことについてもいう。君子豹変」で,「童子問(1707)中・一九」等2点の用例が付いている。両項の「上六~/~征凶」「過ち/あやまち」「うつる/移る」の不統一は日本流らしいが,原典の引用も多義の解説も『広辞苑』と色々と違い其々示唆的な処が有る。後者の【豹変】は「〔易経革卦〕(豹の毛が抜け変わって,その斑文が鮮やかになることから)君子が過ちを改めると面目を一新すること。また,自分の言動を明らかに一変させること。今は,悪い方になるのをいうことが多い」,【君子は豹変す】は「〔易経革卦“君子豹変すとは,其の文^ハ蔚^ハうたる(斑紋が華やかに美しくなる)也”君子は過ちがあればすみやかにそれを改め,鮮やかに面目を一新する。俗に,考え方や態度が急に一変することに使われる。君子豹変」と言う。両辞書共通の【君子豹変】の「君子は豹変す」に同じは「和化」優位の感じがするが,『日本国語大辞典』の唯一の用例は「もしや草紙(1888)〈福地桜痴〉三一」なので,約900年も早い和風熟語の先行は外来語に対する日本の加工・改造の習性を裏付ける。中国語由来の単語・成句は^{とも}俱に『現代漢語詞典』に入っていないが,『漢語大詞典』の【豹変】には日本語の今日の俗な転義は出ていない。「《易・革》:“上六,君子豹変,其文蔚也。”」等3点の典拠が付く主な語義は,「謂如豹文那樣發生顯著的变化。幼豹長大退毛,然後疏朗煥散,其毛光沢有文采」(豹の斑文の様に顕著な変化が生じることを言う。幼い豹は大きく成ると毛が抜け,後に^{まば}疎らに勢い良く散っており,その毛は光沢と華麗な色彩が有る)で,続いて「後喻人的行為變好或勢位顯貴」(後

に人の行為が好い方に変ることや権勢が盛大に成ることに喩える)と有り、出典は「《三国志・蜀志・後主伝》：“降心回慮，応機豹変。”」等4点が有る。両義とも否定的な意味が無いのは中国に於ける豹の皮の^{イメージ}の良さの証であるが、日本語の変容と対照すれば中国人の集団的な価値観・美意識の一端が窺える。

注

- 1) 白川静『字統』，平凡社，1984年，104、698頁。
- 2) 竹内誠一郎「**W杯2次予選 敗退の危機**」中国サッカー“三難辛苦”/チームプレー苦手 試合中コーチに“服従” 人材育成置き去り/外国人指導者“中国の選手 他人のために走れない”，『読売新聞』2015年11月25日。
- 3) 佐々木健一『辞書になった男 ケンボー先生と山田先生』（文藝春秋，2014年）の記述（82～93頁）が詳しい。
- 4) 『広辞苑』第6版の【漢字】の語釈に、「現在は中国・日本・朝鮮で使用」と有るが、本稿の記述は朝鮮・韓国で行政命令に由り殆ど使われていないという実情に基づく。
- 5) 二月河『乾隆皇帝』第6巻『秋声紫苑』，河南文芸出版社，1999年，529～530頁。
- 6) 「巨人の肩の上」，「ウィキペディア フリー百科事典」日本語版（最後閲覧＝2016年1月27日）。
- 7) 注6に同じ。
- 8) 毛の元護衛長李銀橋の回想を記した『走下神壇の毛沢東』（権衛赤著，中外文化出版公司，1989年）の題より。
- 9) 「よみひとしらず」，「ウィキペディア フリー百科事典」日本語版（最後閲覧＝2016年1月27日）。
- 10) 蘅塘退士『唐詩三百首』序では、「諺云：熟誦唐詩三百首，不会吟詩也會吟」に作る。
- 11) 蕭涤非等『唐詩鑑賞辭典』，上海辞書出版社，1983年，1390～1391頁。
- 12) 本稿中の孟子語録の和訳は，主に内野熊一郎『孟子』（明治書院『新釈漢文大系4』，1962年）に依拠した。

(夏 剛，立命館大学国際関係学部教授)

由辞典所见日中两国特征（一）

本系列论文主要通过分析权威性语文辞典的释义、说明、举例、引据等，探索并揭示日中两国语言、思想、文化及国情等的种种特征。

连载首回的本部分先着眼于语文辞典反映国家特征的性质，以当代两国各具代表性的辞典为切入点，透过具体例证寻觅文化背景、历史根源、社会基础，盘点“汉字文化圈”内的连结与断层。

其次注目中国的“‘名’的文化”、现世至上主义所致的功利性在语言上的表露，将日语的暧昧、委婉与汉语的鲜明、强烈加以对照，就日本吸取性格相异的中国文化时保持的自身特质作多面的评述。

继而由汉语喜对称、整合和日语与之相反的倾向引出两种语言错位的问题，同时以体现中国集体性价值观、审美观的“豹死留皮，人死留名”等为例，验证日语对汉语的日本化移植、派生乃至独创之中又不乏深层的相通。

（夏 刚，立命馆大学国际关系学院教授）